

エロ同人種付けおじさんが主人公なのは間違っている(確信)

ジル・ザ・リッパー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時間ができたので書いてみた。

これまで多くの転生チート系を見たけど、エロ同人の種付けおじさんっていうどう考えても地雷でしかないような能力を持った主人公見たことないなと思ったのでやってみることにしてみた。

目次

種付けおじさんがどう考えてもハズレなのは分かる	1
アイズちゃんは天使、はつきりわかんかね	6
可哀想なのは抜けないというが、体は正直です	10
アリバイを作れば、事実すら嘘に出来る。	14
賭け事は嫌いだが、勝てる勝負は大好きなのだ	17
祝え！新たなる王の誕生を！上	22

種付けおじさんがどう考えてもハズレなのは分かる

目が覚めたら、俺は巨大なステンドグラスの床の上で目の前に霧がかかった認識できない人がいた。この場所、著作権的に危ないと思いながらもう一度眠ろうとした。だが目を閉じられない。

霧の人は、目の前に箱を取り出して俺に箱を手渡してくる。俺は受け取って箱を確認すると、箱には穴が開いていた。穴の中に手を入れると、何枚か紙が入っていた。俺は適当に紙を引いてみると、紙には「全てのエロ同人の種付けおじさん」と書かれていた。次の瞬間、俺の意識は闇に溶け、覚醒した。

目が覚めると、俺の体は十歳程に若返った状態で路地裏に座り込んでいた。身に付けている服も、ボロボロの布切れで浮浪者のようだった。

目覚めたばかりで喉が乾き路地裏から出ると、目の前に広がる光景に息を呑んだ。俺の目の前にはファンタジーがあった。エルフに獣耳、剣を腰に携える者達が溢れ返っていたのだ。町を歩くと、中世のような町並みがあり、進み続けると川が見えた。

俺は川の水を飲もうと川を覗きこむ。川に写った風景に塔のようなものが見える。だがそれ以上に気になったものがある。川に写った顔は、俺の見慣れた顔ではなかった。その顔は醜く、まるで陵辱物のエロ本に出てくるおじさんのような顔だった。頬を捻るが痛みがある。

俺は、さっきの夢の中での出来事、紙に書かれた内容、現在の状況と川に写った自分の顔、全てを結び付け理解し、絶叫した。

自分は、成り代わり若しくは転生したという事実には叫ばずにはいられなかった。

昨日俺は、ミアハフアミリアに入団した。どうやら俺は、ダンまちの世界に転生したようだ。生きるためには働くしかないのです、俺は入団できるフアミリアに片っ端から声をかけた。そして、唯一入団できたのがミアハフアミリアだったのだ。

入団したミアハフアミリアは多くの団員がいたが、その殆どは醜い俺の顔を見て嫌な顔をしてきた。気持ち悪いという言葉が聞こえた気がした。好きでこんな顔になった訳じゃないのに。

今の俺は、無料で支給されたナイフ1本でモンスターを狩っていた。しかし、使っていくうちに切れ味が悪くなってしまふ。1階層で狩り続けるが、余裕過ぎて辛い。

ギルドでは1階層だけと言われたが、俺は行けるところまで行ってみようと考え、下の階層に降りることにした。

狩って余裕があるなら下の階層に降りて、狩って余裕なら降りて、狩って降りて、狩って降りて……、単純作業を繰り返したせいで、気が付いたら何処まで進んだか分からなくなっていた。手に持っていたナイフもいつの間にか無くなっていて、拳で殴り倒していた。

そして、奴が現れた。牛の頭に人の体、ミノタウロスだ。確か主人公は、こいつを倒してレベルが上がったんだなと思いつながら俺は見つからないように逃げようとした。しかし、背後から狼みたいなモンスターが襲ってきたので殴り倒した。狼は声をあげて倒れ、ミノタウロスに気付かれた。

俺は、ミノタウロスに殴りかかる。だが、びくともしない。ミノタウロスは、腕を振って俺を殴り飛ばす。俺は壁にぶつかり、意識が遠くなるのを感じる。

こんな痛い思いをするのは何故なのだろう？こんな醜い姿になったのは何故なのだろう。そうだ、あの靄の人が俺をこんな目に遭わせたのだ。怒りが沸き上がる。すると、右腕の感覚が可笑しく感じる。右腕を見ると、右腕は肩から先が人間の腕ではなく、無数の触手に

なっていた。

俺は痛む体を無理矢理立ち上がらせる。触手が重いのか、重心が右寄りになってしまう。ミノタウロスは、俺が生きているのが分かると襲いかかる。俺は触手のある右腕を突き出す。触手は1つに纏まり、俺よりも大きなミノタウロスを殴り飛ばした。

俺はこの事実驚いて触手に触れる。触手に触れると、触り慣れた感触がする。そうだ、これは勃起の感触だ。だが、どうして？ 混乱する俺の頭の中に、声が聞こえた。

『祝え！ 全エロ同人の種付けおじさんの力を受け継ぎ、全てを犯し人の願望を力に変える性の王者！ その名もエロ同人種付けおじさん！ 誕生の瞬間である！』

頭の中の声はそう言つて、俺に告げる。そして、俺は自分の力を理解する。

「なんか… イける気がする」

殴り飛ばしたミノタウロスは起き上がり、殴り掛かってきた。最初のような油断などなく、本気で殺そうとする動きだ。俺の動きでは避けられないのは理解した。そして、俺は力を望む。

ミノタウロスの動きが止まった。まるで、時間が止まったかのように。俺は自分の力を、種付けおじさんの力を完全に理解した。この力は、エロ同人に存在する種付けおじさんが出来ることを全て使える能力なのだ。触手に関しては触手物のエロ同人、ミノタウロスが止まったのは時間停止物のエロ同人の力だ。

時間を止めても、後一撃が限界の俺の力ではミノタウロスを倒しきれない。俺は更に力を使う。俺は5人に増殖する。増殖乱交物のエロ同人の力を使う。これなら倒しきれる筈だ。

「触腕、剛拳！」

質量と重量のある右腕でミノタウロスの頭を殴った。続けて分身達がミノタウロスの頭を殴った。そして、時が動き出す。ミノタウロスの頭は、殴り飛ばされる一撃を一気に受け弾け飛んだ。

俺は、ミノタウロスの魔石を回収して上の階層上がった。ミノタウロスを倒した後だと、他の魔物が雑魚に見えてしまう。触手が自動

的に襲いかかる魔物を倒してしまおうので、俺はダンジョンから出るために足を動かすことだけ考えた。

ダンジョンから出ると、俺の右腕の触手は元の腕に戻っていた。そして、俺はギルドから怒られた。ギルドは俺が戻ってこないで死んだと思っていたらしい。俺は四日ほどダンジョンにいたようだ。ダンジョンの中では日の光を見ることもないし、何故かお腹が空かないので時間の感覚が全く無かった。

ギルドの説教が終わってミアハファミリアに戻ると、ミアハファミリアのホームは無くなっていた。近くにいた人に聞いてみると、ミアハファミリアは借金をしてしまい元のホームを売ってしまったらしい。ミアハファミリアは没落、ある種の解散だ。今は、別の場所に安いホームを借りているようだ。

俺はミアハファミリアに帰ると、ミアハ様に死人でも見るような顔をされた。そして、ミアハファミリアの現状を説明された。ナーザさんを治療するためにファミリアのお金を使い、更に義手を手に入れるために借金をしたこと、俺にはファミリアを抜ける選択肢があること。

俺は別に、借金に関しては別に良いと思う。ナーザさんは、こんな見た目の俺を差別せず笑顔で対応してくれた人だし、俺を受け入れ団員のためにここまでしてくれる優しい神様に恩返しをしたいと思いたいに残ることにした。

そして、ミアハ様にステータス更新をして貰う。

ゼノクス・レイパー

Lv1

力：0↓501

耐久：0↓475

器用：0↓103

俊敏：0↓621

魔力：0

《スキル》

【エ○○人○付けおじ○ん】

- ・望む肉体に改造する
- ・自らの欲望により能力強化
- ・感情の高ぶりにより効果向上

…… 新しく出現したスキルは文字化けのステータス上昇値トータル1500オーバー。俺は、ミア様とナーザさんにどれだけの無茶をすればこうなるんだと怒られた。

アイズちゃんは天使、はつきりわかんだね

俺は、前回の探索の怪我の療養のためにダンジョンに潜ることを禁止され、オラリオをさ迷っていた。ミアハ様には俺がミノタウロスを倒したことを伝えたのだが、ミアハ様にこう言われた。

「ゼノクス、お前はステータス0の状態でミノタウロスを倒すという偉業を成し遂げた。しかし、レベルアップにはステータスが足りない。これからは、地道にステータスを上げていくのだ。」

現在の俺は、FGO民で言うところの初心者が星5鯖を手に入れて、再臨素材はあるけどレベルが足りない状態なのだ。そう言われたので俺はダンジョンに潜りたいのだが、ミアハ様とナアーザさんに怪我が治るまではダンジョン禁止ということで、暇を持て余していた。

ダンジョンの魔石を換金したので、借金を返す分を差し引いてもある程度は残っている。丁度小腹が空いたので、俺は近くの屋台で何か買うことにする。じゃが丸くんか、安いしいくつか買っておこう。

「じゃが丸くん小豆クリーム味を10個頼む。」

俺はじゃが丸くんを買って、近くの木陰で食べることにする。すると、じゃが丸くんの屋台に俺よりも小さい1人の少女がやって来た。

「じゃが丸くんの小豆クリーム味、10個ください。」

「ごめんね、小豆クリーム味はさっき全部売れちゃってね。」

「そんな……。」

少女は目に見えて落ち込んでいた。俺が10個も買ったことで少女が買えなかったみたいだが、俺は気にせずじゃが丸くんを食べる。すると、少女はいつの間にか俺の真正面で俺の持つじゃが丸くんを凝視していた。

俺は手に持つじゃが丸くんを右に向けると少女はじゃが丸くんを目で追い左を向く。左に向けると少女は目で追い右を向く。俺は食べ掛けのじゃが丸くんを少女に向けてみる。少女は気にせず食べ掛けのじゃが丸くんをモキュモキュと食べた。

可笑しい、絶対に可笑しい。俺の見た目は、エロ同人の種付けおじさんという存在事態が犯罪みたいな見た目をしているんだ。なのに

目の前の少女は、そんなことを気にしないかのように俺の食べ掛けを食べているのだ。浮浪者のような格好をしているわけでもないのだ。

少女が食べ終わると、今度は俺の顔を見てくる。少女は、嫌な顔をすることもなく俺の顔を見てくる。見られることに耐えられなくなった俺は、少女にじゃが丸くんを渡す。

「……食べるか？」

「うん。」

少女はじゃが丸くんを手にとると、俺の隣に座ってじゃが丸くんを食べ始めた。少女から、女の子特有の良い匂いがする。すると、少女が話しかけてくる。

「じゃが丸くん、ありがとう。あの、お金——」

「気にするな、そこまで金に困ってない。」

俺は見栄をはる。少女の頬には小豆クリームが付いていた。俺は少女にクリームが付いていることを教える。

「頬にクリーム付いてるぞ。」

「えっ？こっち？」

「違う、反対だ。取ってやるから動くなよ。」

俺は指でクリームを取ると、少女は俺の指を啜える。少女は丹念に俺の指に付いたクリームを舐め取る。正直、上目使いで指を舐める光景と舌使いのせいで勃起寸前になっている。俺は急いで心を無にする。

やがてじゃが丸くんは無くなり、そろそろ移動しようかと考えていると、少女の頭が俺の膝の上に乗った。俺は突然の出来事に混乱するが、少女から寝息が聞こえる。どうやら、食べて寝てしまったようだ。初めて会った俺にここまで無防備だと、見ていて心配になってきてしまう。

それにしても綺麗な顔をしている。寝ている少女の頬に指で触れる。柔らかいですべすべしている。フニフニと頬をつついてはいるが、少女は起きる気配がない。俺は、少女の柔らかい唇を指でつついてみる。すると俺の指は少女の唇に吸い付かれた。俺は完全に動けな

くなり、少女が目覚めるまで指を吸われ続けた。

三時間程だろうか、やっと少女が目を覚ました。吸い付かれた指が少女の涎まみれでふやけてしまった。少女は、俺の顔を見るとペこりと頭を下げる。

「寝てしまつてごめんなさい、ありがとうございます。」

「…… 気にしてない。」

俺は立ち上がって帰ろうとする。すると少女に呼び止められた。

「名前、教えて。私はアイズ、アイズ・ヴァレンシユタイン。」

「…… ゼノクス、ゼノクス・レイパー。ゼノでいい。」

「私も、アイズでいいです。またお礼させてもらいます。」

俺は答えることもなく、その場を離れた。

ファミリアでは、今後の方針を決めるための会議が行われていた。現在、ミアハファミリアは俺以外戦える団員がいないので実質商業系のファミリアだ。しかし、借金のせいで店も小さくなり現状の売り上げでは落ちる一方。そこで新しいポジションを作る事になったのだが、そう簡単に作れる筈もない。新しいポジションを作るにも、ダンジョンから素材を手に入れる必要もあるし、何度も失敗を重ねることになるだろう。

俺は、療養のためにダンジョンに入れないので自分でも作ってみようとするが失敗してしまう。作る度に失敗し、無駄に素材を消費してしまう。イライラする。

すると、また頭の中に声が聞こえる。

『祝え！全エロ同人の種付けおじさんの力を受け継ぎ、全てを犯し人の願望を力に変える性の王者！その名もエロ同人お薬種付けおじさん！また一つ、エロ同人の力を継承した瞬間である！』

「なんか、できる気がする。」

俺はこのままポーションを作ってみると、面白いポーションが出来た。空気に触れると爆発する性質を持つポーションと、一時的に魔力と自然回復能力を引き上げるポーションが完成した。

しかし、生産に関しては俺以外が作ると安定しない為、大量製造は出来そうになかった。仕方がないので、可能な限り二種類のポーションを量産した。

量産したポーションは、ディアンケヒト・ファミリアに高値で売れた。神ディアンケヒトからレシピを売ればもつと金を出そうと言われたが、ナーザさんは現在このポーションを完璧に作れるのは俺だけだし、作ったときに失敗して賠償金を要求されるかもということまで断つたらしい。

少なくともミアハファミリアは、ある程度の借金の分を差し引かれても安定した金銭の確保できる状況を得ることが出来た。

可哀想なのは抜けないというが、体は正直です

俺は現在、怪我も治り久しぶりにダンジョンでモンスターを狩っていた。今の俺は、ナイフも壊れてしまったので拳でモンスターを殴り倒している。触腕が使えるかと思っただが、今のところ腕が変化することもない。

ダンジョンで爆発ポーションを使ってみたが、かなり使い勝手が良い。相手に投げつければ当たらずとも怯ませる事もできるし、当たればリザードマン程度なら即死したり、死ななくても火が纏わり付く。問題があるとすれば、瓶に入っているので相手に攻撃された拍子に瓶が割れば自爆する可能性がある事だ。複数持っていたとしたら、誘爆して洒落にならないことは確かだ。

モンスター狩りを拳で行っていると、また頭の中から声が聞こえる。

『我が性王、何故あなたは武器を使わないのですか？』

使わないのではなく、買い換えるのに金を使いたくないだけだ。拳の方が、ナイフを使うよりも楽で切れ味も気にしないから効率が良い。拳、万歳である。

『では我が性王、自らで武器を作れば良いではないですか！』

俺に鍛冶の経験はない、無理を言うな。

『我が性王、あなたはまだ自らのスキルを理解していないようだ。1つ、レクチャーしましょう。武器を作りたいのであれば、感情を解放すれば自然と理解できるでしょう。』

それ以降、頭の中の声は聞こえなくなった。そういえば、触腕の時も、ポーションを作る時も怒りやイライラした時だった。個人的な考えだが、スキル発動には感情の起伏がトリガーになるのだろう。現状で引き出せるような感情は、何か無いだろうか？怒りもイライラも引き出せない俺は、諦めてダンジョンを出ることにした。

ミアハファミアリアのホーム(仮)に帰ってきた俺は、今日の夜に歓楽街に行こうと計画していた。ここではエロ本の一冊も無いので自家発電ができないという死活問題に直面したのだが、歓楽街で女を買えば性欲処理に童貞も卒業できる。多少金はかかるが、男の俺には死活問題である。

夜中、俺は出来る限り音も立てずに部屋を出る。ある程度のお金を持って外に出ようとする。しかし、ある人物の声に呼び止められる。

「ゼノクス、どこに行くの?」

声の主は、ナアーザさんだった。俺は適当な理由をつけて、逃げようとする事にした。

「少し夜の散歩に、な。」

「…… なら、そのお金の入った財布は何ですか? 本当は、どこに行く気だったんですか?」

「…… 歓楽街。」

俺がそう言うと、ナアーザさんはため息を吐きながら目頭を抑える。

「ゼノクス、今私達にはそんな事に使うお金の余裕はない。我慢してもらえると嬉しいのだけど……。」

「そんなこと言ったって、借金を返してからだと俺は後何年待たされるんだ? それに、借金を返す分は取り除いてあるんだ。個人的な金銭を使う分は別に文句はない筈ですよね?」

「それは、そうだけど……。」

「俺がどうしようとか俺の勝手だ。ならナアーザさんが、俺の相手をしてくれるんですか?」

「……。」

俺がそう言うと、ナアーザさんは黙ってしまった。俺はそのままホーム（仮）を出ていこうとすると、腕を捕まれた。振り返ると、ナアーザさんが顔を真つ赤にしながら涙目で俺を見ていた。

「……分かった。私が相手をする。」

俺はナアーザさんに腕を引っ張られ、部屋に連れ込まれた。

おかしい、ナアーザさんはミアハ様が好きだった筈だ。万が一、億が一にも俺を好きになるようなことは無い筈なのだ。なのに俺の目の前には、俺のズボンを脱がして左手で俺の一物を弄っていた。

「……下手でごめん、中々大きくなる。」

ナアーザさんは、申し訳なさそうにしながら俺の一物から顔を逸らす。慣れない手付きで一物をしごくいていく。ナアーザさんの手の温もりが気持ち良くなり、一物が少し大きくなる。

「ゼノクスは何もしないで、私が全部するから。」

ナアーザさんはそう言っつて、唾液を俺の一物にかけていく。ナアーザの左手が俺の一物をしごく度に、グチュグチュといやらしい音を立てる。直ぐに射精感が込み上げてくる。

そして、俺は果てた。射精した精液がナアーザさんの顔を汚している。俺が射精し終わると、何とも言えない幸福感と背徳感に襲われる。

俺はナアーザさんの顔を見る。ナアーザさんは泣いていた、大粒の涙を溢しながら泣いていたのだ。俺はナアーザさんの顔についた精

液を拭き取って話を聞く。

「ナアーザさん、どうして？何でこんなことを？」

「……から。」

「えっ？」

「……私が、何の役にも立てていないからっ！ミアハ様に助けてもらったくせに、ゼノクスみたいにダンジョンに潜れもしなければ、新しいポジションを作ることだってゼノクスに敵わないっ！私が先輩なのに、何もできなかったっ！全部、入ったばかりのゼノクスに頼ることしかできないっ！」

ナアーザさんは、悔しさと情けなさでグチャグチャになった顔で俺を見てくる。

「もう、私が出来ることとはこんなことしかないからっ！ゼノクスが居なくなったら、きつとミアハファミリアは大変なことになるっ！だから、ゼノクスの役に立てそうなことは出来る限りやろうっ！でも、でもお！」

ナアーザさんは、それ以上語らずに泣いた。俺は、ナアーザさんが泣き疲れて寝るまで背中を擦った。ナアーザさんをベッドに寝かせ部屋を出ると、ミアハ様がいた。どうやら声が聞こえていたようだ。

「ミアハ様、今聞いたことは全て忘れてください。全ては夢だった事にした方が、ナアーザさんにとっても都合が良いです。」

「……そう、だな。ゼノクスよ、今のナアーザは心が不安定だ。今日のようなことが、またあるかもしれん。余りストレスを掛けぬようにしてやってくれ。」

俺とミアハ様はそう言い合って、自らの部屋に戻った。

俺は、今感じる嫌悪感を強くイメージする。すると頭の中から声が聞こえる。

『我が性王、ようやく感情がトリガーになる事に気付いたようですね。後はその感情をコントロールすることが出来れば、武器は自ら産み出される。』

それきり頭の中から声は聞こえなくなった。俺はさっきの出来事のせいで、中々寝付けなかった。

アリバイを作れば、事実すら嘘に出来る。

俺は朝目覚めると、朝食を作る。感情のコントロールをすることで武器が手に入るとあのエロウオズが言っていたが、絶対にロクな武器が手に入る筈がないので気が乗らない。そんなことを考えていると、ナアーザさんがやって来た。

「ゼノクス……昨日は―」

「あつ、ナアーザさんお早うございます。昨日の夜は、ミアハ様と今後の事について説教ありで長々と話してて大変でしたよ。」

「……え？でも昨日は。」

ナアーザさんは、驚いた表情で俺を見てくる。これが俺の選択、昨日は夢だった作戦である。俺はそのままナアーザさんに嘘を言う。

「ナアーザさん、欲求不満でも夜声を抑えた方がいいですよ。隣の部屋でミアハ様と話しているときに、色っぽい声聞こえてましたよ。」

「……っ！」

ナアーザさんは、顔を真っ赤にしながら部屋に戻ってしまった。それと同時にミアハ様がやって来た。

「ミアハ様、ナアーザさんには昨日のことは夢で、俺とミアハ様は今後の事について話していたことにしています。」

「そうか……ゼノクスよ、助かった。」

「昨日の出来事はナアーザさんの記憶に残ってたみたいなので、欲求不満で変な夢を見たことにしているので、ミアハ様も何か聞かれたら声を抑えろとも言うってください。それでどうにかかります。」

俺はミアハ様と嘘の辻褄を合わせて朝食を取った。ナアーザさんは、俺とミアハ様が食事を済ませた後に食事を持って部屋に帰っていった。

人気の無いダンジョンの10階層、俺は昨日の出来事を思いだし心を気持ち悪い感情で満ちた。そうすると、俺の手元にどす黒い靄が発生する。そして頭の中から声が聞こえる。

『我が性王、ようやく武器を手に入れるのですね。』

やがて靄は形を作っていく。俺はその靄を握ると、質量を感じた。しかも、気持ち悪いくらいに手に馴染む。まるでオナニーの時に握る一物のような感触だ。

『祝えー！これが全エロ同人種付けおじさんの使う最初にして最強の武器、ラスト・カラミティである！』

目の前には、♂のマークをそのまま形にした者があった。丸い穴の部分が持ち手という、どう考えても使いにくい武器だった。名前から察するにラストは恐らく色欲か最後を意味する。カラミティに関しては、災厄や疫病神を意味する。ある意味、俺にお似合いかもしれない悲しい武器だった。

「おい、エロウオズ。これの使い方について教えて。」

『それに関しては説明するよりも、我が性王の方が理解できる筈です。』

頭の中の声は、それだけ言って消えてしまう。見た感じ、この武器は槍か剣のように見えるが使い方が解りづらい。

近くにオークが複数見えるので早速使ってみる。

『太刀スギー！』

逆手持ちしたラストから変な音が鳴るが気にせずオークを両断する。少し離れた場所にいるインプに突きを放つ。

『槍スギー！』

すると刀身が伸び、離れた場所にいるインプを串刺しにする。戦闘

音を聞き付けた飛行するコウモリのモンスターにそのままラストを振り回す。

『反リスギ！』

今度は鞭のようにしなつて、コウモリを地面に叩きつける。どうやらこの武器、戦闘時に状況に合わせて能力を変化させるみたいだ。

そんなことを考えていると、いつの間にかオークとインプの集団が近くまで迫ってきていた。俺は、少ししか使っていないがラストがどのような武器なのかを理解し、刀身を握って数回擦る。

『ガンダチ！』

そして、剣先を迫り来るモンスター達に向ける。

『テクノ・ブレイカー！ダシスギイ！』

五月蠅い音と共にラストの剣先から、謎の白い光が発射される。それを受けたモンスターは一瞬でバラバラになっていく。俺はそのまま、ラストから出る白い光でモンスターを尻ぎ払っていく。

光が収まると、俺の身体にとてつもない脱力感が発生する。テクノブレイクって死んでるじゃねえかと考えていると、頭の中から声が聞こえる。

『流石は我が性王、直ぐにラスト・カラミティの力を理解するとは！』
握った瞬間、何となく理解できてしまった。これ完全に男の一物がモデルになっている。恐らくだが、俺の物を擬似的に投影して作られたのだろう。カラミティの名前の通り、災厄を通り越して最悪だ。

俺はラストを消し去り、拳を握る。

人前でこんな卑猥な武器を使えるかっ！そう思いながら、俺は出現してきたモンスターに向かって殴りかかった。

帰宅後、ステイタス更新でまた馬鹿みたいな上昇率を見たミアハ様が倒れた。今回は仕方ないと思いつながら、今後は地道に殴り倒していかうと考えるゼノクスであった。

賭け事は嫌いだが、勝てる勝負は大好きなのだ

武器の使用を試して見ると、五月蠅い音がなるが使い勝手が良い武器だった。鞭の状態は、相手を叩いたり拘束するだけでは無く、ダンジョンの天井や壁に突き刺さって移動にも使える。手元から武器がなくなっても、武器が光の粒子のように消えて手元に戻ってくる。

何処のキーブレードかな？嫌、心ではないけれど女という鍵を開く意味ではある意味これもキーブレードなのか？

ダンジョンを出てみると、外は夕方だった。それにしても、一人だと倒したモンスターの魔石を持ちきれず、拾うのも一苦労だ。俺は、拾った魔石を換金する為にギルドに行こうとすると、小さな人とぶつかった。ぶつかった拍子に小さな人の手元から大量のヴァリスが零れ落ちる。そして、それを追うように男がやって来てその小さな人の首元を掴んで地面に叩きつけた。

「サポーターの糞が！俺の金を盗みやがって、ぶつ殺してやる！」

男はそう言つて、腰の武器を抜く。刃が振り下ろされる前に、俺はヴァリスを拾つて男に渡す。

「おい、落としたぞ。一体何があった？」

「ん、ああすまねえな。サポーターの屑が、俺の金を盗みやがったんだ！」

男はそう言つて俺から金を受けとると、小さな人を踏みつける。小さな声がそのサポーターから聞こえる。

「……あなたが、お金を払わなかったから——」

「五月蠅い！只の荷物持ちしかできない屑にくれてやるやる金なんて無いんだよ！」

そう言つて、男はまた小さな人を踏みつけようとする。俺は、その男を突き飛ばして阻止する。

「痛っつ！何しやがる！」

「つまり、大体お前が悪いということが分かった。」

俺は、ラスト・カラミティを出現させて男の喉元に切っ先を突き付ける。男は慌てて発言する。

「何怒ってるんだ!?!サポーターの屑に払う金なんて無いに決まってるだろ!」

「サポーターの仕事は、冒険者のサポートだ。お前はそのサポートの恩恵を受けた。金を払うのは当然だ。」

「荷物持ちに、折角稼いだ金を払えっていうのかよ!」

「荷物持ちだろうと、仕事は仕事だ。サポーターは命を懸けてダンジョンに潜って冒険者の荷物持ちをしているんだ。払う金がないなら、最初からサポーターを雇うな!」

俺はそう言って、小さな人の体を抱き抱える。そして、俺はギルドに向かった。

ギルドに事の顛末を伝え、サポーターを寝かせる。俺は魔石を換金して、サポーターの目が覚めるまで側で待つことにした。

「んっ……ここは?」

「目が、覚めたか?」

「ッ!?あ、貴方は!」

「落ち着け、先ず身体に痛みはないか?」

「は、はい。リリは、大丈夫です。」

俺は、サポーターに飲み物を渡して話をする。

「お前はこれからどうするんだ?」

「どうするって、リリは弱いので冒険者にはなれません。また誰かのサポーターとしてお金を稼ぎます。」

「そうか……なら、俺のサポーターになつてくれないか?」

「えっ?」

驚いた顔をするサポーターに、俺は続けて発言する。

「現在俺は、サポーターを募集しているんだ。今日もダンジョンに潜ったんだが、魔石を持ちきれなくて大変なんだ。報酬は稼ぎの四割でどうだろうか?」

「…… そんなに貰っても良いんですか?」

「ああ。君の答えを聞かせてくれ。」

「…… 完全に信用できませんが、よろしくお願いします。」

「信用に答えられるように、行動で示させて貰おう。」

ここに、一人のサポーターとエロ同人種付けおじさんのコンビが結成された。ダンジョン探索は、二日後に開始することを決め、俺はサポーターと別れた。

次の日、ダンジョン探索は休みを取り自由行動をすることにした。俺はいつも通り、じゃが丸くんを購入して木陰で食べていた。

少しすると、誰かが俺の隣に座る。アイズ・ヴァレンシユタインだ。俺は、隣に座るアイズにじゃが丸くんを渡すと、アイズは隣でじゃが丸くんを頬張る。

「アイズ、自分でじゃが丸くんを買ったらどうだ?」

「ごめん。今度は、私が奢る。」

お互いにじゃが丸くんを食べ終わると、アイズは俺の肩に頭を乗せる。俺は、アイズに質問をする。

「アイズ、お前は何故冒険者になったんだ?」

「……聞きたい？」

「お前が答えてくれるならな。」

俺がそう答えると、アイズは答えてくれた。

小さい頃に両親が帰ってこなくなり、冒険者になったらしい。

「お父さんとお母さんが、いつか私だけの英雄に巡り会えればいいねって言ったけど、私は待つのをやめて自分が強くなるうって決めた。だから私は強くなる。」

俺はアイズのその言葉に、強い何かを感じとる。当たり前だ、アイズは七歳で冒険者になり、たった一年でレベルアップしたんだ。普通の冒険者と覚悟の強さが違う。俺は、そんな彼女を守りたいと思ってしまった。

「なら、それになってやる。」

「えっ？」

「俺が、そのお前が言う英雄になってやるよ。」

アイズは可愛そうなものを見る目で俺を見てくるが、俺は気にしない。

「無理だよ。ゼノ、私より弱いから。」

「なら強くなる。先ずは、お前よりも早くレベルアップしてやる。一年以内、いや半年以内にレベルアップしてやる！」

俺がそう言うと、アイズはクスクスと笑う。

「そんな簡単になれるなら、苦労はしないよ。」

「それでもやる、これは誓いだ。アイズ、賭けをしようぜ！もし、俺がこの誓いを守ることが出来たら、可能な限りアイズに何でも命令できるってことで！出来なかつたら、アイズの命令何でも聞いてやるよ。」

「うん、楽しみにしてる。」

俺は内心、笑っていた。アイズは何を命令するか楽しみにしているが、俺は何時でもレベルアップ出来るという出来レースをアイズに仕掛けた。詐欺？違うよ、俺はこの事実を伝えていないだけ、知らないアイズが悪い。

賭け事は嫌いだ、勝てる勝負は大好きなのだ。

冒険者になって二週間、俺はステイタスを強化するためにレベル

アップを保留している。もう少ししたらレベルアップしようと思った。

アイズと別れると、頭の中から声が聞こえる。

『我が性王、やっとレベルアップをするのですね！でしたら、私も我が性王にプレゼントを贈りましょう！』

頭の中の声はそう言うと、頭上から何か落ちてきた。俺はそれをキャッチすると、それにどこか見覚えがあった。

「これは、ライドウォッチ？いや、形的にアナザーライドウォッチか？」

俺はウォッチのスイッチを押すと、ウォッチから音が聞こえる。

『ハザードオン！』

「アカン！」

俺は急いでウォッチをしまう。この危険物どうしよう？俺は、内心冷や汗をかきながら帰宅した。

祝え！新たなる王の誕生を！上

あれから一週間、俺はリルルカと共にダンジョン探索を始めたが、結構楽しかったりする。リルルカが魔石を拾ってくれるので、かなり儲けられているので懐も暖かくなり二人で食事をするなど、充実した生活を送っている。

こんな生活が、ずっと続けば良いのに。そんなことを考えていた俺だが、この時はあんなことになるとは思ってもいなかった。

その日は、何時ものように10階層辺りでの魔物狩りをしていた。今日は何故かオークやインプが多く出現してきた。

俺はモンスターをいつも通り殴り続けていたのだが、何か可笑しい。オークやインプがいつもより倒しやすいのだ。俺のステータスが成長しているからという意味ではなく、まるで敵意が無いのだ。例えるなら、何かから逃げているみたいに。

そして、油断した俺は気がつかなかった。霧の中から俺に目掛けて何か飛んできたのだ。それは、このダンジョンに生えている植物の塊だった。

俺は、吹き飛ばされ地面に転がる。痛みを耐えながら戦えないリルルカを確認すると、そこには絶望が迫っていた。

リルルカの近くに、ミノタウロスが2体も迫ってきているのではないか。可笑しい、ミノタウロスはもつと下層にいるモンスターなのに、何故2体もこんな上層にいるんだ!?

ミノタウロスはリリルカの命を奪おうと腕を振り上げる。俺は、急いで腕を触腕に変えてリリルカに向かって走り出す。

「リリルカに手を出すな！」

俺は、触腕でミノタウロスを殴り飛ばしてリリルカの前に躍り出る。俺は、急いでリリルカに逃げるように指示をした。

「リリルカ、早く逃げ「嫌、来ないで化け物！」っえ？」

俺は後ろを振り替える。リリルカは、恐怖で歯をガチガチと鳴らしながら涙を流して震えていた。その目に写るのは、腕から無数の触手を生やした俺の姿だった。

「殺されるっ！来ないで化け物！」

「おい、リリルカ！しっかり！」

よそ見をしていた俺は、ミノタウロスが振るった拳が直撃し、吹き飛ばされた。ゴリゴリと脇腹から骨の碎ける音が聞こえ、俺は血を吐きながら地面に転がった。

痛みで体が動かない。地面で転がる俺の目に映ったのは、ミノタウロスに捕まれたリリルカが投げ飛ばされる瞬間だった。

「やめ……ろ……か……のじよに……手……すな。」

『我が性王、何故渡したものを使わないのです？このままでは、貴方も死んでしまう。貴方は王にならなければいけない存在だ。貴方が使おうとしないのなら、私が貴方に使いましよう。』

誰かが俺に近づいてくる。そいつは深くフードを被り、顔が見えない。そいつは俺の懐からウオッチを取り出してスイッチを押す。

『ハザード！』

そして、ウオッチを俺に押し付けた。

その瞬間、俺の体から痛みが消え立ち上がる。俺の体は黒く染まり、とてつもない程の破壊衝動に襲われた。

俺は、ミノタウロスに殴り掛かる。ミノタウロスの体は吹き飛ばされ、地面をバウンドしながら転がっていく。ああ、気持ちが良い！すぐにでもイッてしまいたいそうさ。

もう一匹のミノタウロスが突進して襲いかかってくるが、俺は正面から受け止めて角を握る。いつの間にか存在する腰のレバーを回す。

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！ヤベー！』

俺はミノタウロスに蹴りを放つと、ミノタウロスの角が折れ吹き飛ばされる。俺は握っていた角を手離して、次の標的を探す。

ミツケタ、地面に転がる弱者の姿を。

俺は、それを掴んで持ち上げる。それは血を吐きながら虚ろな目で何かを呟いている。俺は無視して腰のレバーを回す。

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！』

俺は、拳を握ってその命を奪おうと振り上げる。

そして、俺はその声を聞いた。

「ごめ……んなさい、ぜ……ノクスさ……ま。」

体が動きを止める。何故だ？何故、これは俺に謝っているんだ？嫌、これは何だ？これは……そうだ、リリルカだ。俺は何故、リリルカを殺そうとしているんだ？それに、この黒い腕は何だ？俺は、リリルカを掴んでいた腕を離す。

『可笑しい、予言では我が性王は暴走によってリリルカ・アーデを殺し、王の力を手にする筈。何が起こっているんだ？』

俺は、いつも聞こえていた頭の中の声が後ろから聞こえてきたので振り返る。そこにはフードを被った男の姿があった。そうか、お前が俺に何かしたのか。

そんなことを考えていると、また意識が破壊衝動に襲われ飛びそうになる。俺は急いでウォッチの排出する。

『ウォッチを自ら排出!?!どうやら我が性王は、予言以上に成長しているようだ。』

俺は、取り出したウォッチをラスト・カラミティで破壊した。それと同時に、倒れていたミノタウロスは起き上がり、こちらに向けて歩きただした。

「全く、嫌になる。いきなりこんな姿に変えられて、身一つで知らない世界に飛ばされ、今死にかけてるなんて。」

俺は、リリルカを見る。どうやら痛みでもう意識はないようだ。

「こんな姿になって、沢山の人達に嫌われたりしたけど、こいつや神様、ナアーザさんにアイズに普通に接してもらえて、もしかしたら、こ

んな俺でも普通に生きていけるとか思っちゃったよ。」

俺は、この世界に来てずっと孤独を味わっている。だが、数少ないが俺と一緒に居てくれる優しい人たちが俺の心を癒してくれたのだ。また、あの孤独を味わうのは嫌だ。

「こんな力欲しくなかった！けど、もう俺に残っているのはこの力しかない！どうか俺に力を貸してくれ！王にでも何でもなつてやる！だから、大切なものを守るために！」

俺の手に光が収束する。その瞬間、2体のミノタウロスが襲いかかってくる。が、2体のミノタウロスは何かの力によつて吹き飛ばされた。

『下朗！お前達ごときが我が性王の誕生の瞬間を邪魔するなど、おこがましいにも程がある！下がれ！』

ミノタウロスを吹き飛ばしたのは、フードを被った男だった。男は俺に膝まずいて、何かを差し出す。それはベルトだった。

『我が性王、これを。使い方はご存じの筈。』

俺はベルトを受け取り、ウオッチのスイッチを押す。

『ラスト！』

「これは、俺の選択だ！」

俺は、ウオッチをベルトにセットして、ベルトを回した。

『レイパータイム！仮面レイパー！ラスト！』

『祝え！全エロ同人種付けおじさんの力を受け継ぎ、次元を越え、全ての命を管理する生の王者！その名も、仮面レイパーラスト！正に、王に相応しいお姿だ！』

「なんか、生ける気がする！」

俺はラスト・カラミティを構え、走り出した。